

長谷寺
十一面観音像
重要文化財

高さ 10.18 メートルのこの十一面観音菩薩像は、日本の観音像としては最も背の高いものの一つであり、長谷寺の本尊である。室町時代（1336～1573 年）の 1538 年につくられたもので、近江国（現在の滋賀県）産の楠の神木を使ってつくられた。輝きを放つ漆と金箔で表面が覆われている第一の顔は、慈悲の菩薩としての役割にふさわしく、優しい表情をしている。観音は「人々が幸せであるように」という造られた当初の願いを受け継いでいる。11 の顔は様々な表情をしていて、その数の意味についてはいくつかの解釈がある。悟りに至るまでの道筋の 10 の段階を表しており、11 番目の一番上についている顔が悟りを開いた状態を示している、という解釈もそのひとつである。

観音像としては珍しいことに、この長谷寺の観音は右手に数珠と錫杖を持っている。さらに、通常の仏像のように蓮の花弁の飾りなどがついていない、簡素な台の上に立っている。このことは、観音が日常の世界の中に存在しているということ、そして祈りを捧げる者に対して観音が示す共感を象徴している。春と秋、3 月上旬～6 月下旬と 10 月中旬～12 月上旬の期間、この像が収められている部屋を拝観することができる。参拝者たちは願いを込めてその足を触ってきたため、その部分の金箔がはがれ、黒光りしている。